

安満星（柱本瑞俊）の 英領インド調査（1907年～1909年）

— 安満星の円明院と柱本瑞雲宛私信の整理報告 —

白須浄眞・江間さやか

(2013年10月3日受理)

Investigation by Ama Akira (Hashiramoto Zuishun) in British-Ruled India from 1907 to 1909
— A report of organizing private letters which Ama Akira addressed to Enmeiin and Hashiramoto Zuiun —

Joshin Shirasu, Sayaka Ema

Abstract: We conducted the third investigation at Meikakuji of Kyoto in March 2013, and found out private letters at the time of the India investigation by Ama Akira (Hashiramoto Zuishun). Based upon those letters, it was revealed that the solitary investigation in India (1907-1909) by Ama Akira was conducted before the Second Otani Expeditionary Party. Since that is the fact which has been unknown before, those private letters are enormously valuable as historical sources. Also note that Hashiramoto Zuishun was the same person whose name was changed from Ama Akira; Enmeiin, one of the address, was the mother of Otani Kozui who dispatched the Otani Expeditionary Party; and Hashiramoto Zuiun was his father.

Key words: Ama Akira, Hashiramoto Zuishun, India investigation, Otani Expeditionary Party

キーワード：安満星，柱本瑞俊，インド調査，大谷探検隊

はじめに

2013年3月、白須、江間さやか（広島大学大学院D2）は、柱本瑞俊資料を内包する京都・明覺寺資料の第三次調査を実施し、柱本瑞俊（安満星）のインド調査時の私信を中心に整理作業を行った。その際、第二次大谷探検隊のインド調査に先行する安満星の単独インド調査に係わる資料を見出した。彼が円明院と柱本瑞雲に宛てた私信群がそれで、大谷探検隊の実態研究に新情報をもたらす注目すべき資料である。白須拙稿「大谷探検隊員・柱本瑞俊資料と明覺寺資料」に、「明覺寺資料Ⅱ群」として分類した資料に含まれる¹⁾。

ここにいう安満星とは、1908（明治41）年8月19日に改姓、次いで1909（明治42）年2月8日に改名して柱本瑞俊となった人である。円明院とは、西本願寺第21世宗主・明如、すなわち大谷光瑞の父・大谷光尊の室となった藤子であり、「お藤の方」とも呼ばれた人である。その円明院・藤子の妹が安満星の母であり、安満星にとっては円明院は伯母であり、大谷光瑞とは従兄弟という関係になる。安満星の生家は、鹿児島県加治木の性応寺であり、幼少期をその地で過ごした後、円明院・藤子のもと、つまり京都・西本願寺大谷家の家族の住まい・錦華殿から京都第二中学に通い、卒業した。そして卒業とともに西本願寺の職員となり、大

谷探検隊員として活動し、次いで当寺の要職も占めるに至った。その概略は前掲拙稿に、また詳細は白須浄眞・門司尚之「安満星・柱本瑞俊仮年譜」(I)に述べたとおりである²⁾。また柱本瑞雲とは、安満星が柱本瑞俊として養子となった明覺寺の住職であり、父である。瑞雲は明覺寺の第16世住職であり、瑞俊は第17世住職である。安満星が、調査地英領インドから円明院と柱本瑞雲にしきりに私信を寄せたのは、このような関係によるものである。

なおこの安満星のインド調査については、彼自身が柱本瑞俊の名で、二楽荘における「現在の王舎城」と題する講演の冒頭に、次のように触れている³⁾。

私は去る明治四十年の冬に日本を出発してインドに到り、同四十二年五月に帰朝し、更に同年八月再びインドに赴いた。

と。したがって安満星のインド調査は、通常言われる第二次大谷探検隊の柱本瑞俊としてのインド調査とは別の調査活動であったことになる。しかし安満星が柱本瑞俊と改姓改名したため同一人物の活動とは容易には理解しにくく、安満星が英領インドから円明院と柱本瑞雲に宛てた私信に出合って、はじめて第二次大谷探検隊のインド調査に先行する柱本瑞俊の安満星時代のインド調査に確信が持てるようになった。揺るがない証左を得たからである。1907(明治40)年冬から1909(明治42)年5月に到る安満星の英領インド調査は間違いなく実施されていたのである。したがって、

左の一文はラダーク地方を旅行せられたる安満星氏が昨年十月十五日スリナーゴより藤山通報所長に発せる通信なり。之を読むに雪山辺境の風物歴々観るが如く載せて読者に其の興趣を領つ(記者)

という記者の序文を付し、安満星の名で、1909(明治42)年の『教海一瀾』の第148号と第149号に掲載されていた「ラダーク(Ladark)旅行記」は、間違いなくこの時の記録である。「昨年十月十五日スリナーゴより」とあるから、この旅行記が掲載された1909年の前年、1908(明治41)年の当日であることは疑いがないからである。「スリナーゴ」は、スリナガルである。後述するように、安満星はダーズリンなどにも赴いているが、当時、これらも含めた報告があったかは、現時点では掌握していない。

1 安満星が、英領インドから円明院と柱本瑞雲に宛てた私信リスト

| No. | 投函地と受取人と私信の様式と発信年月日 |
|-------|--|
| No. 1 | 上海から円明院宛の絵葉書 1907(明治40) 12.20 |
| No. 2 | マドラスから円明院宛の絵葉書 1908(明治41) 1月 |
| No. 3 | マドラスから柱本瑞雲宛の絵葉書 1908(明治41) 1.13 |
| No. 4 | カルカッタから円明院宛の絵葉書 1908(明治41) 1.16 |
| No. 5 | ダーズリンから柱本瑞雲宛の絵葉書 1908(明治41) 2. 9 |
| No. 6 | カルカッタから柱本瑞雲宛の絵葉書 1908(明治41) 5.28 |
| No. 7 | シムラから柱本瑞雲宛の絵葉書 1908(明治41) 6. 7シムラ消印 |
| No. 8 | スリナガルから柱本瑞雲宛の絵葉書 1908(明治41) 6.19 |
| No. 9 | スリナガルから円明院宛の封書 1908(明治41) 7.12 |
| No.10 | レーから円明院宛の封書 1908(明治41) 9. 1 |
| No.11 | スリナガルから円明院宛の封書 1908(明治41) 10.22 |
| No.12 | ボンベイから円明院宛の封書 1908(明治41) 12.13 |
| No.13 | ボンベイから円明院宛の封書 1909(明治42) 2. 2 |
| No.14 | 上海から円明院宛の封書 1909(明治42) 4.13 |

なお、図版と解説を掲載すべきであるが、紙数に限りがあり、一部の解説を残して割愛した。消印スタンプの移録も割愛した。別途、公開の方法を模索する。

2 安満星(柱本瑞俊)の行程と私信の移録と解説

凡例

私信文面には、行を表示する。□は、読み切れない文字を示す。■は、文字一字の抹消を示す。□□□は、文字群の抹消を示す。⊕のように囲んである文字は、文字の推定を示す。読みにくい箇所は、原文を〔 〕で示して読みやすくした。漢字は、旧字体ではなく現行体とする。

日本発 1907（明治40）年11月16日以降の冬⁴⁾、インド調査に出発。

上海着 1907（明治40）年12月18日

上海発 1907（明治40）年12月20日

No. 1 上海から円明院宛の絵葉書

【表】

京都市

五条通大橋東

大谷御本廟

円明院様

〈解説〉「大谷御本廟」とは、親鸞の遺骨を納めた鳥辺野北辺の「大谷」に建立された廟堂に由来する西本願寺の施設。「西大谷」。京都市東山区五条橋東6丁目514。円明院は、当時ここに住まいしていたのであろう。

【表・下部】

- 1 一昨日上海へ着仕候。早速
- 2 出張所へ参り、藤山さんの
- 3 御世話になつて諸所見物仕候。
- 4 西洋人や支那人や日本人や
- 5 印度人や、町と云ふ町どこへ行ても
- 6 大混雑。馬車と人力車、自
- 7 転車でなかなか〔な可、ゝ〕歩くのが〔可〕
- 8 むつか〔六可〕敷く御座います。東
- 9 京等の頭底及ふ所て御座い
- 10 ませぬ。今日（二十日）十一時に
- 11 出帆致す筈に御座候。
- 12 星

〈解説〉「出張所」とは、西本願寺の上海出張所。「藤山さん」とは、清国開教総監付賛事長・藤山尊証。

【裏】

F. 169 S. S. Kanagawa Maru. 丸川奈神（下部印字）

〈解説〉神奈川丸は、欧州定期航路に就航していた日本郵船の大型貨客船。

マドラス着 1908（明治41）年1月□日

マドラス滞在 1908（明治41）年1月13日

マドラス発 1908（明治41）年1月□日

No. 2 マドラスから円明院宛の絵葉書

【表】

Kyoto

Japan

via Kobe

京都市五条通

大谷御本廟

円明院様

1 御気嫌伺ひ上奉候

2 星

3 マドラスより

（上部）二月十六日着（円明院による書き込み）

【裏】

Bamboo Island, Cubbon Park, Bangalore.

Higginbotham & Co. Madras & Bangalore. No. 232A（下部印字）

No. 3 マドラスから柱本瑞雲宛の絵葉書

切手がはぎ取られているため切手上の消印は読めないが、周囲に残った消印は‘CAL…’と読める。したがって、カルカッタでの投函であろう。文面は、マドラスとなっているから、当地で書いてカルカッタで投函したと判断してよい。No. 2も同様である。

【表】

Mr. Z. Hashiramoto

Kyoto

Japan

Via Kobe

京市市中油小路北小路上路

柱本瑞雲様

1 御機嫌伺上げ候

2 星

3 一月十三日

4 マドラスにて

【裏】

Mylapore Temple and Tank, Madras.

Higginbotham & Co., Madras & Bangalore. No. 59A.（下部印字）

カルカッタ着 1908（明治41）年1月16日

カルカッタ滞在 1908（明治41）年1月18日（No.4 消印スタンプより）

No. 4 カルカッタから円明院宛の絵葉書

【表】

Kyoto

Japan

Via Kobe

【表・左部】

1 京都五条通橋東大谷本廟

2 円明院様

- 3 海陸共無事。本日（十六日）カルカッタ
 - 4 へ着仕り候間、御安心願上度候。此処
 - 5 は印度の首府にて第一の都会。中々
 - 6 東京どころにはこれなく立派な家
 - 7 が〔可〕たくさん御座候。然し、さはが〔可〕
しくて
 - 8 大坂の様にごみの街に御座候。
 - 9 着とすぐ領事に面会仕候。内々
 - 10 深切な人に御座候。此処に一休みして
 - 11 愈、目的地の探険に参るべく候。
 - 12 星
- （上部）二月十六日着（円明院による書き込み）

【裏】

（左上印字）7099. A Native Village.
（右上書き込み）土人の村に候

カルカッタ発 1908（明治41）年2月7日
ダーズリン着 1908（明治41）年2月8日

No. 5 ダーズリンから柱本瑞雲宛の絵葉書

【表】

Mr.Z.Hashiramoto.
Kyoto
Japan
Via Kobe

日本京都市新町通
北小路上ル
柱本瑞雲様

【表・左部】

- 1 二月七日カルカッタ出発。翌日当地へ着仕り候。
- 2 本年夏季中滞在の予定にて、目下
- 3 下宿屋を探し居り候。何れ〔連〕定り
- 4 次第、御通知申上べく。気候は
- 5 丁度、日本の十二月頃の様に思はれ候。
- 6 ダズリンより 星
- 7 二月九日

【裏】

Darjeeling, General view looking towards
Observatory（下部印字）

カルカッタ着 1908（明治41）年5月□日
カルカッタ滞在 1908（明治41）年5月28日
カルカッタ発 1908（明治41）年6月1日

No. 6 カルカッタから柱本瑞雲宛の絵葉書

【表】

Kyoto

Japan
京ト市新町通北小路上ル
柱本瑞雲様

- 1 五月廿八日出 カルカッタにて 星より
- 2 来月一日頃か〔可〕ら旅行に参るつもり
- 3 に御座候。百度以上の熱をさけて
- 4 涼しき地方へ参る事とて悦び
- 5 居り候。
- 6 当地の郵便局の図に御座候。

【裏】

7054（右上印字）
（右上書き込み）

- 1 真宗聖典全書
- 2 和漢両部、只今落手仕候。
- 3 難有く御礼申上げ候。

The General Post office, Calcutta.（左上印字）

シムラ着 1908（明治41）年6月3日ごろ？

シムラ滞在 1908（明治41）年6月7日（消印スタン
プより）

No. 9にも「カルカッタ……を出発致し、約二昼
夜の汽車旅行にてシムラ……。此の地に参りて五
日間滞在……。」（12～16行）とみえる。

シムラ発 1908（明治41）年6月8日ごろ？

No. 7 シムラから柱本瑞雲宛の絵葉書

【表】

Z.Hashiramoto Esq.
Kyoto
Japan
Via, Kobe

京ト市新町通北小路上ル
柱本瑞雲殿

- 1 六月一日カルカッタ出発、カシミル行
- 2 き途次、当地シムラに立ちより候。
- 3 印度の第一の避暑地にて、政府
- 4 初めの役所が〔可〕夏季中此所に
- 5 うつる所に候。今、日本の総領事館も
- 6 此所に御座候。
- 7 印度シムラにて 星

〈解説〉シムラとは、西北インドのヒマラヤ山
脈の麓にある英領インド帝国の夏の都。日本の
総領事館は、カルカッタだけではなくここにも
あった。

【裏】

（右上書き込み）

- 1 御機嫌を伺ひ
 - 2 御健康を祈る
 - 3 星
 - 4 父上様
- 414 FIVE VIEW OF SIMLA, FROM
JAKKO. (左上印字)

ラホール着 1908（明治41）年6月9日ごろ？

ラホール発 1908（明治41）年6月15日ごろ？

No. 9に「シムラ……五日間滞在致しのち、又一昼夜の汽車旅行をつゞけ、にラホール……。尚二昼夜の馬車にて、漸くカシ米尔国のスリナガーと申す所に着仕り」（16～18行）と見える。

スリナガル着 1908（明治41）年6月17日

スリナガル滞在 1908（明治41）年6月19日

No. 8 スリナガルから柱本瑞雲宛の絵葉書

【表】

Kyoto,
Japan
Via Kobe

京都市新町通御前通下ル

柱本瑞雲殿

- 1 カシ米尔、スリナガーに六月十七日着仕り、
- 2 三ヶ月程滞在のつもりに候。
- 3 気候、景色、共に良ろしく、元気に
- 4 面白く暮し居り候間、御安心
- 5 被下度く候。
- 6 星
- 7 六月十九日

〈解説〉スリナガーはスリナガルのことで、当時は英領インド帝国のカシ米尔藩国の都。

【裏】

VISITORS REACH IN KASHMIR.(下部印字)

スリナガル滞在 1908（明治41）年7月12日

No. 9 スリナガルから円明院宛の封書

「表書き」のない封筒で年次などは分からない。何らかの事情で別の封筒に入れられたのであろう。しかし、便箋には「星」の名前が記され、文面にスリナガル滞在が明記される。したがって、安満星の1908（明治41）年6月17日のスリナガル着と、同年7月20日の同地発との連続性から推して、発信日の7月12日（39行）は、1908（明治41）年の同日と判断する。

【本文】

- 1 西須磨よりの御玉章、只今、拜受仕り候。
- 2 何の御さわりもあらせられ〔連〕ず、御消光の由、御目出度く御悦び申上候。
- 3 御本殿の上方々様も御機嫌御うるはしき御事、目出度き
- 4 限りに存じ候。伊勢の文子様、御病氣御良ろしか〔可〕らざりしとの
- 5 御事、然し今頃は御全快遊ばされしと存し上げ候。
- 6 何時も、何か〔可〕ら何まで、くわしく御知らせ戴くので、まことに
- 7 気づよく、錦華殿へは音信おこたため様致し居り
- 8 候へども、何分向ふは、いそが〔可〕しきとみゑて、一向くわしき手紙を
- 9 くれる人なく、六甲の方も、御庭の事、さては須磨の御様
- 10 子まで何くれ〔連〕と御知らせにあづか〔可〕り、実に有難く御礼申上候。
- 11 先達て来、絵はが〔可〕きにて御報知申上げ候通り、六月の初め
- 12 カルカッタと申す日本での東京とも申すべき地を出発致し、約二昼
- 13 夜の汽車旅行にてシムラと申して山の上で富士山の七合目程の
- 14 高さの処、印度政府初め日本の総領事館も夏季中（第一紙末）
- 15 此所へ転て事務を取れ〔連〕る所に候。此の地に参りて五日間滞
- 16 在致しのち、又一昼夜の汽車旅行をつゞけ、にラホールと
- 17 申す処に立ちより、尚二昼夜の馬車にて、漸くカシ米尔国
- 18 のスリナガーと申す所に着仕り、現今、此所に船住居致し居り候。
- 19 土地は高く気候涼しくて、草木も青々、水も清々、甚よろし
- 20 き所に候。印度在の西洋人等、多く避暑に参り居り、湖と
- 21 川が〔可〕甚多くて、皆^{*}船の内に住居致し居り候。
- 22 御命により近々高山の旅行に出達仕るべく、いづれ〔連〕も白雪を
- 23 戴ける地方とて随分寒く候はんも、面白き事多か〔可〕らんと
- 24 たのしみ居り候。去年の冬は印度行きの途中

- で、なかなか〔な可、〕暑く、
 25 只今の夏はヒマラヤの雪の上で、夏冬入れ
 〔連〕変りし調子に御座候。
 26 御蔭様で身体益々盛んに何等の故障もなく、
 元氣此の上も
 27 なく候間、御安心願度候。愈々山奥へ入れ〔連〕
 ば日本よりの
 28 通信一ヶ月半を要し、一層遠方の様な心持仕
 り候。 (第二紙末)
 29 目に見るものすべてが〔可〕新らしく、聞
 くものは皆めづらしく、
 30 御土産話の種も沢山に出来る事と存し候。
 31 別紙私自身で手製の写真、甚おか〔於可〕し
 候へども、只今の私に候間、
 32 御笑草迄、御送り申上げ候。又英字を印さつ
 せる紙は、
 33 私の宛名に御座候間、以後御手紙を戴く時に
 状袋の
 34 表紙に御はりつけ被下れば、はが〔可〕き
 にても何にても参り申すべく、
 35 御ひまも御座候節は何卒、御消息仰(ママ?)
 ぎ上げ候。
 36 此の度支那よりモウコを経て橋と野村の二名
 が〔可〕当地方へ
 37 参る由に候。何れ〔連〕私面会(ママ)の出来るの
 は十二月か〔可〕一月時分と
 38 存じ悦び居り候。
 39 七月十二日 其の天笠(ママ)(笠?)より大和の空
 を
 40 はるけくなが〔可〕めつ、 星
 41 円明院様
 42 御許に〔尔〕 (第三紙末)

【用紙裏】

- 1 何れ〔連〕来年にも渡る事に候故、
- 2 沢山封入仕置き候。
 〈解説〉「西須磨」,「須磨の御様子」の須磨とは、
 西本願寺の須磨月見山別邸。明覺寺資料のなか
 にその別邸の絵はがきを見だしている。この
 別邸は宮内省に売却されて武庫離宮(今の須磨
 離宮公園)となり、大谷光瑞は、神戸六甲に二
 楽荘の建設を開始した。文面に見える「六甲の
 方」とは、二楽荘である。柱本瑞俊は、須磨月
 見山別邸から出された円明院の手紙に触れてい
 るから、須磨月見山別邸から二楽荘への交代期
 1907~1908年のことと理解しておく。「御本殿」
 とは錦華殿。「伊勢の子様(せんじゅじ)様」とは大谷光瑞(ときわ いまう)の
 妹。真宗高田派本山の専修寺の法主・常磐井莞

獣(う)に嫁いでいた。専修寺は三重県津の一身田
 町。伊勢と言うのはそのため。「御庭の事」とは、
 本山・西本願寺を指すのであろう。「橋と野村
 の二名」とは、第二次大谷隊の橋瑞超と野村栄
 三郎のこと。大谷隊の実態研究には、重要な情
 報⁵⁾。

スリナガル発 1908 (明治41) 年 7月20日
 イスラマバード着 1908 (明治41) 年 7月21日
 レー着 1908 (明治41) 年 8月13日
 レー滞在 1908 (明治41) 年 9月1日

No.10 レーから円明院宛の封書

【封筒表】

Via.Bombay -Kobe
 Kyoto
 Japan
 京都市五条通橋東
 大谷御本廟にて
 円明院様

【封筒裏】

印度
 九月一日出 星拜
 封

(左端) 十月八日着 (円明院による書き込み)

【本文】

- 1 円明院様 印度カシ米尔国レイに於て
 九月一日 星
- 2 御機嫌如何に御消光被遊候哉、伺上候。
- 3 追々涼しく相成り、御持病の御腹痛の起る時
 候と
- 4 御心配申上居り候。御障り遊ばさぬ様、御躑
 康
- 5 何より御大切に。幾偏にも祈り上げ候。〔略〕
 私は
- 6 いたって〔到て〕元気に毎日天幕の内に暮し
 居り候間、御安
- 7 心被下度く。永らく山中旅行にて、郵便局御
 座
- 8 なか〔可〕りし為、御不音に打ち過ぎ、失礼
 仕り候。
- 9 到る処、所変り品変りて、印度と申せば暑き
 暑き
- 10 たへ難き所とのみ被存候へども、当地方は富
 士より
- 11 高き山続きにて、万年雪におおはれ〔掩は連〕
 涼しさすぎて

- 12 寒き所も沢山通り申し候。写真、随分集まり
Kyoto,
- 13 候へども、何分旅行中にて紙■やき出来申さ
Japan
ず。
- 14 追て御送り申し上げべく。只今は雪の山のほ
京都市
とりに
五条通東山
- 15 咲ける可愛き高山植物、少しばか〔可〕り御
大谷御本廟
覧に入れ〔連〕候。
円明院様
- 16 まつ白な氷と雪との拡大なる山にも、か様な
【封筒裏】
花咲き、
十月廿二日
- 17 少し下れ〔連〕ば赤、紫、黄、桃色等に咲
印度にて 星
き分けた
- 18 御花畑の景色等は、日本でとても見られ〔連〕
十一月廿日着（円明院による書き込み）
ぬも
【本文】
- 19 のに御座候。
1 円明院様 印度にて 星
- 20 淳浄院様、本年印度へ御成りと存し悦び居り
2 愈々御機嫌御良ろしく
候処、先日
3 御消光被遊候御事、大賀の
- 21 京都よりの通信に、今年^は御渡印なき由承り、
4 到りにたへず候。下て私は七月の上旬
がっかり〔可^つ可^り〕
5 より、当地スリナガーと申す地を出發
- 22 致し〔志〕候へども、何れ〔連〕来年には御
6 仕り、ヒマラヤと申して、日本の富士山
成りの御事と存候。
7 程の高山を沢山集めし様な地方を
- 23 申上げ度き事は数限りなく候へども、只今は
8 旅行仕り居り。内には万年雪に掩
- 24 此れ〔連〕にて失礼申上ぐべく。追て先日、
9 はれ〔連〕し氷山に雲と雪と氷と石ころとの
柱本より私の
外
- 25 実名瑞俊と頂戴仕りし様、承り候。柱本へは
10 になにもなき所に、八、九月の夏中にもか
26 通信常に致し居り候。右まで。勿々頓首
〔可〕ゝ、
- 【同封別紙】
11 はらず外套を着てふるゑて露嘗
- 1 高嶺^(マツ)（嶺？）の花
12 致候。又は鬱々と繁れ〔連〕る森の内に
- 2 いづれ〔連〕も一万尺以上の高山に
13 草花を探し〔志〕、きつ立て並風^(マツ)（屏風？）
の如き
- 3 咲けるものに御座候。
14 大岩石の上を通り、色々と変りし所を
- 4 小さき桜草は雪の山に
15 見て、大方二百里たらずの道を経て、
- 5 雪のきへし所々の草原に
16 漸く十月の十日に再び当地に帰着
- 6 こけの^(マツ)咲り居り可愛く候。
17 仕り、其の時八月十九日夜御差出し
- 7 日本まで幸色が〔可^つ〕変らぬ様
18 被下候、御なつか〔可〕しき御文^(マツ)戴仕り、
- 8 折^(マツ)（折？）り居り候。此の度、追て
19 何くれ〔連〕とこまごまに御認め戴き、不便
- 9 変りし花を御覧に共すべく候。
20 の山中より出て参りし時とて一層難有く、
- 10 印度カシミル国レイにて
21 くりか〔可〕へしくりかへし拜読仕り候。
- 11 四十一年九月一日 星
22 六甲の御様子、須磨の御話し、御本殿
- レー発 1908（明治41）年9月3日
ヘミツ（Himiz）寺院訪問
23 の御事より、何から何までくはしくはしく
- レー着 1908（明治41）年9月4日
24 御知らせにあづか〔可〕り、日本の御模様、
- レー発 1908（明治41）年9月6日
25 目に見る様、気も清々致す程に被存、
- スリナガル着 1908（明治41）年10月10日
26 実に実に難有く深く御礼申上候。
- スリナガル滞在 1908（明治41）年10月22日
27 永々の旅行中も別に障り御座なく、
- No.11 スリナガルから円明院宛の封書**
28 病氣と申しては只の一度も致さず、
- 【封筒表】
29 益々元気につとめ居り候間、
- Via. Bombay-Kobe
30 乍憚御安心願上げ候。
- 31 此の冬、橘・野村に面会出来る事も

32 存し居り候處、先の都合にて来年
 33 にのびる事と相成り、又私は一人にて
 34 十一月の末より当地を下り、冬には本^函
 35 の積尊^函(涅?) 槃地探しに参る事と
 36 相成り申し候。
 37 或は本年末、十二月時分には、
 38 淳浄院殿、ロンドンよりの御帰途に
 39 当印度へ御立ちより被遊るとの御事、
 40 未だ確か〔可〕には不明に候へども、悦び
 41 御待ち申上げ居り候。何れ〔連〕其の節
 42 には御供して印度中見物出来る
 43 事とたのしみ居り候。堀内の
 44 妹は時々御伺ひ申上げ候哉。若し参り
 45 候はば、私は元気に致し居ると御申し聞け
 46 戴き度く。筆末なが〔可〕ら、益々
 47 御身体御躰全に御願ひ御祈り
 48 申上げ候。■■■勿々頓首
 〈解説〉「淳浄院」は、大谷尊重の院号。大谷光
 瑞の二番目の弟。1910(明治43)年1月11日、
 継法に就任し、光明と改名⁶⁾。この淳浄院・大
 谷尊重の「ロンドンよりの御帰途」とは、アフ
 リカ調査を兼ねたものである。

ボンベイ着 1908(明治41)年12月10日
 ボンベイ滞在 1908(明治41)年12月13日

No.12 ボンベイから円明院宛の封書

【封筒表】

Kyoto
 Japan

京都市五条通橋東大谷御本廟
 円明院様

【封筒裏】

一月■■七日着(円明院による書き込み)
 印度孟買にて 星

【本文】

1 御床の福寿草の花、綻ぶ頃と相成り、以前私
 の学^函
 2 婦りに東寺の植本市より水仙の根と一緒に
 3 買って参りし時の事等、思い出され〔連〕申し
 候。
 4 寒気きびしきおりから〔於り可ら〕、折角御
 身体御大切
 5 の程、重々祈り上げ候。下りて私は、十日
 6 当地孟買^{ボンベイ}に罷り申し、久しぶりに日本人
 7 に面会申し候。当地は印度中最も
 8 日本人の多き所にて、領事館初め郵船会社、

9 正金銀行、三井物産会社、其の他貿易雜
 10 貨商店等、多く御座候て、街も立派なる
 11 建物ばか〔可〕りにて、電車、自動車、自転
 車、馬車等、
 12 織るが〔可〕様に町を走り居り候。
 (第一紙末)
 13 一週間以内には、倫^(マツ)淳(敦?)よりあふりか
 〔可〕を経て、
 14 淳浄院殿当地に御成り被遊筈に御座候。
 15 愈、御なつか〔可〕しき院様に二年ぶりに御
 面会申上げ
 16 て御供致す事と悦びの限りに存じ、日々御
 17 待ち■■申し上居り候。私も早、日本を出発申
 して
 18 より一年を経候故、自分には相分らず候へど
 も、大分変
 19 り居る事と存じ候間、其の内には写真をうつ
 して
 20 御機嫌伺ひに御送附仕る考へに御座候。
 21 幸ひ私しは例の如くに元気にて、■■■■毎々
 毎々
 22 見物に追はれ〔連〕、気候も只今は日本の四
 月時分の様
 23 にて至極良ろしく気持ち良き上に、院様の御
 成と
 24 云ふたのしみを前に見て居る次第に御座候
 25 故、御察しの通にびちびちに暮し居り候。
 (第二紙末)
 26 まだ日本へは何時帰れる事やら相分り申さ
 27 ず候。
 28 絵はが〔可〕き数葉御送り申上候。当地
 29 孟買の景色に御座候。
 30 十二月十三日
 31 星より
 32 円明院様

ボンベイ滞在 1909(明治42)年2月2日

No.13 ボンベイから円明院宛の封書

【封筒表】

Kyoto,
 Japan

京都市五条通大橋東
 大谷御本廟にて
 円明院様

【封筒裏】

印度孟買

二月二日 安満星

三月一日着〈円明院による書き込み〉

【本文】

- 1 円明院様 印度孟買
二月二日 星
- 2 拝啓、此の手紙は三月の上旬、着致す事と存じ候。寒気も去り
- 3 御庭の青芽も出そろひて、春景色御うるはしき御事と御察し
- 4 申上げ、愈々御機嫌御よろしき御事と大賀奉り候。
- 5 当地印度も三月初め頃迄は涼しくてよろしく、其れ〔連〕より追々
- 6 暑く相成るべく候。扱、愈々一昨夜（一月三十一日の夕方）
- 7 淳浄院様、渡辺哲信氏をつれ〔連〕で御機嫌御麗はしく
- 8 孟買港へ御着遊ばされ〔連〕候。私は御船の沖に見ゆる頃より
- 9 海岸で御待ち申上げ、波止場へ御着■と同時に舟中へ御迎ひ
- 10 申し上げ、長の御遊行にも少しの御被労も御見受け申さず、
- 11 甚御健康にて実に見度き限り御悦び申上候。
- 12 院様は御髪を真中より両方へ御分は（け？）被遊、御鬚を御のばし遊ばし
- 13 て、一層御年召した様、拝せられ〔連〕候。同夜すぐホテルへ御宿り被遊、
- 14 其の後は私は毎々御伺ひ申し上げ居り候。今夜は領事の官舎
- 15 にて御招待申し上げる由にて、私も御供致すべく。印度へは一ヶ月（第一紙末）
- 16 ばか〔可〕り御旅行被遊る、御予定にて、其れ〔連〕より又、英国へ御帰り
- 17 被遊る、様、承り居り候。当分は私も院様の御供致して、
- 18 印度中廻る事と悦び居り候。
- 19 日本よりの御書信や新聞等、沢山参り居り、御観被遊■れ〔連〕で、
- 20 毎日御いそが〔可〕しく、何れ〔連〕五、六日後には孟買を御出発遊ばさる
- 21 御團と存じ居り候。
- 22 申し上げ度き事、山々に候へども、私は只今宿より
- 23 院様のホテルへ参上する前にて候為、又追々

ひまあり次第に

- 24 御報申し上ぐべ■く。
- 25 折角御百養御大切に、御健康御良ろしく
- 26 御消光の程、幾重にも祈り申上げ奉り候。匆々

インド発

上海着

上海滞在 1909（明治42）年4月13日

No.14 上海から円明院宛の封書

【封筒表】

日本
京都市五条通大橋東
大谷御本廟
円明院様

【封筒裏】

清国上海文路三十八号
本派本願寺出張所にて
四月十三日 安満星

【本文】

- 1 陽春、心待良ろしき氣候と相成り、愈々御機嫌御目出度く
- 2 御消光被遊候御事と大賀し奉り候。此程は
- 3 御法要にて御殿は色々と御取り込みの御事と存じ候。下て私は
- 4 印度出発以来、海上無事に上海迄到着仕候処、
- 5 当地より支那内地旅行を一ヶ月前後の間致す事と相成り、直航で
- 6 本月の十五日には京都へ帰る筈にて候ひし処、右御用に
- 7 よりて五月の末頃と相成るべく候。旅行用意にて少々取り
- 8 込み居り候間、他事は后便に申し上ぐべく、旅行先きの目づら
- 9 しき事[ども]を御通知申上ぐべく候。何れ〔連〕にしても
- 10 印度とは甚近く、然も氣候の良ろしき田舎地方の旅行
- 11 に候間、万事に都合良ろしか〔可〕るべく候。たゞ言葉の分らざるは不
- 12 便に候へども、之れ〔連〕も不通の言葉になれ〔連〕で、手まね足まねも上手に相成り
- 13 居り候間、御安心被下度く。早く御伺し申上げ度く候。一日のみ相まち
- 14 居り候。早々
- 15 四月十三日 安満 星
- 16 円明院様

【用紙裏】

- 1 上海は日本より郵便は五、六日くらいにて参り、至極便利にて
- 2 御座候。日本人も八千人程居り、此の頃は出張所のやっか「可」いに相成り
- 3 居り候。

おわりに

現時点で確認した柱本瑞俊（安満星）の14点の私信を紹介した。掲載した移録文の御活用を願っている。その際は、典拠を示していただければ幸いである。

【註】

- 1) 『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部（文化教育開発関連領域）第62号に掲載。
- 2) 『龍谷史壇』に掲載予定。
- 3) 「現在の王舎城」『二楽荘講演 教師及試補試験問題解釈』出版年次不明、9頁。
- 4) 註2論文、参照。
- 5) 第二次隊に係わっては、白須拙著『大谷探検隊研究の新たな地平』（2012）の第三編「第二次大谷探検隊に関する外務省外交記録」参照。
- 6) 尊重については、拙稿「外務本省に提出された西藏問題に係わる一報告書」白須浄眞編『大谷光瑞と国際政治社会』2011、276～277頁。